

## 雲のじゅうたん

春三月は受験行脚や就職、転勤などで西や東へと時間に急そがされた旅をする機会が多い。車窓から空を眺める余裕等がないかも、雲の表情も最も変化に富んでいる季節である。

この雲の表情を空の上から四季折々に撮り続けた人がいる。全日空のパイロットを二十年以上も努め飛行時間が一萬時間を越えた記録を持通石崎秀尾夫さんである。雲を通して安全と快適な空の旅を求めた氏のプロ意識と、離陸の緊張から解放されたひと時に眼下に広がる美しい雲海に魅せられ、自然とカメラに手が伸びてしまつたのだろう。筆者も米国から成田への帰途、アラスカ西海岸の山並みを埋め尽くす美しい雲海に息をのみ、アリーシヤンの海を埋め尽くす真っ白な霧雲を何時間も飽きずに眺めた続けた記憶がある。

この空からの記録は十年ほど前に石崎さんを中心にまとめられ「雲」という美しい写

真集となつてゐる。航空機は高度十数キロメートルあたりを水平飛行するので圏界面という雲のふたのすぐ上を飛ぶことが多く、カメラの目線が雲と同じレベルにある「風変わった雲」の写真集となつてゐる。

地上に住んでいる私たちにとって入道雲は下から空にニヨキニヨキと空に湧き上がりまるで威圧するかのように空からおおいかぶさるように襲いかかる。これが飛行機から眺めると目線が同じで積乱雲は下からモクモクと盛り上がり対等に見据えることができる。春や秋の風物詩のうろこ雲やハケではいたような巻雲の筋も、紺碧の空をバックにすぐ手の届くような近さで流れる。

時には蜂の巣状の奇妙な層積雲や雲の底がデコボコな形をしている乳房雲が見え、時には白い雲のマンジユウを無数に敷き詰めた雲のじゅうたんの層積雲が眼下に美しく埋め尽くす。一千余年の間に波離着陸の忙しさの中で写真にこそ撮れなかつたが、何層にも重なつた雲が逆光の夕陽に黃金色に輝くといつた光景に出会つていたのではなかろうか。そんな余韻をのこしてゐる写真集であ

る。  
春一番、春二番の低気圧が通過し天気が目まぐるしく変わる三月、目線の高さをかえた観天望氣を空の旅で味わつてはいかがだらうか。

一九九〇年三月二六日